本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第100号　2024年7月1日（毎月1日発行）

木次（きすき）線ストロール⑩　出雲八代（やしろ）駅

「精巧なジオラマと神々が集う神話の里」

取材日は6月17日の月曜日。今年の梅雨入りは遅れていて、今朝も晴れている。麦わら帽子を被り、炎天下の歩きを覚悟した。

庄原の自宅を車で出たのが7時45分ぐらい。備後落合駅の手前を左折して、国道314号線を上ると、沿道の山林に山藤の花がまだかろうじて残っている。標高が高いので、その分、気温が低いからだろう。

9時過ぎに出雲三成駅に到着。9時27分発の列車に乗車。車体は、木次線のシンボルカラーであるきすき色（山吹色）に棚田を象徴する緑のツートンカラー。こうしたラッピング列車が4種類ある。わたしを含めて三人乗車、先客が二人いた。

駅を後にした列車は、やがて坑道のような小さな古いトンネルに入る。トンネルを抜けると、車窓から斐伊川がかなり下に見える。8分ほどで出雲八代駅に到着。下車したのはわたし一人。

一人の初老の男性が、ホームで出迎えてくれた。話を聞くと、駅の業務の民間委託を受けている石原久芳さんで、ミニコミ誌で木次線の駅のレポートをしていることを話すと、いろいろと教えてくれた。

「インバウンドが騒がれていますが、ここにも影響がありますか？」

「けっこう外人さんが来ますよ。昨日の日曜日は、中国の人が多く来ましたね」

やはり月曜日は旅行者は少ないようだ。

木製の駅舎は昭和7年の開業当時のものだろう。黒光りする木のベンチ、出札所の窓口も昔のまま残っている。駅前には赤い郵便ポストと今では珍しくなったボックス型の公衆電話。

村田英二さんの『砂の器』と木次線」によると、亀嵩駅の父子の別れのシーンが撮影されたホームは、出雲八代駅だという。待合室の壁に、映画のスチール写真が掲示されている。丹波哲郎がつかんでいる木製の柵のゲートは、今でも健在である。

出雲神話にちなんだ駅の愛称は「手摩乳（てなづち）」、奇（くし）稲田姫の母神。駅の西方に鎮座する伊賀武（いがたけ）神社の境内に八重垣神社があり、素戔嗚尊（すさのおのみこと）、妻の奇稲田姫、父母神である脚摩乳（あしなづち）と手摩乳を祀っている。

駅員室には立派なジオラマがある。地元の有志などおよそ10人が3年8か月の歳月をかけて完成させた力作で、およそ2メートル四方の大きさで、駅舎やその周辺の街並みが150分の1スケールで忠実に再現されている。第二日曜

近在の鉄道ファンが自分の車両模型を走らせることもある

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会